

経済と経営 35-1(2004.10)

〈研究ノート〉

哲学教育の過去・現在・未来

鷲 田 小彌太

目次

§1 学生たちに

- #1 なぜ、今、哲学は必要か？
- #2 哲学は、もっとも古く、もっとも新しい人間の必須科目である
- #3 日本の大学における哲学教育はどうあるべきか
- #4 ビジネスとしての哲学

§2 教師たちに

- #5 なぜ哲学テキストが必要なのか？ 重要なのか？
- #6 テキストの種類と内容の前提になるもの
- #7 哲学テキストの具体

§3 教育実践の改革点

- #8 授業のサイズによって、授業のやり方が変わる
- #9 成績評価でもっとも大事なこと
- #10 教師の評価について
- #11 教師の採用と待遇について

〔*#5～#11は「テーゼ」集である〕

§1 学生たちに

哲学教育は、第一義に、学生たちのためのものです。教師の好みのためにあるものではありません。その点を確認するために、学生たちにわかりやすく語ってみます。

#1 なぜ、今、哲学は必要か？

若い学生たちに問いかけてみました。

△共通一次試験に秘められた謎 日本が情報化社会の先端を走るわけ

「たとえばですよ、あなたが自分は秀才だと思っているとしたら、暗記能力にかけては誰にも負けないと自惚れているとしたら、21世紀のあなたの未来はちょっと…いや、大いに暗い。」

こんなことを言うと、なにイチャモンつけるんだ、と文句が聞えてきそう。

「暗記能力の優れた人を知識人といってきたんじゃないか。たとえば司法試験に合格するには、大量の知識を記憶し整理しなければいけないじゃないか…。」

なるほど、御説ごもっとも。

でも、あえて私は言わせてもらいます。「暗記の秀才に未来はない」と。脅しではないですよ。つまりこういうこと。

現代は、コンピュータ社会であることに異論はないですよ。ものを記憶するなんてことは、いつちまえばコンピュータがやってくれるんですよ。人間なんか比べようもないほど速く、正確に、べらぼうな量の情報を蓄積し、整理し、発動する。それがコンピュータです。

機械が、人間様の代わりに暗記能力を発揮する時代がやってきたのです。極論すれば、もういらぬわけ、暗記だけの秀才クンは。

逆に必要とされるようになったのが、機械にインプットされた情報や知識を、目的や状況に応じて自在に管理し、使うことができる人材なのです。それも、蓄積された情報をベースにして独創的に考えることのできる人たちなのです。

ここで、ひとつ質問。

「日本が情報化社会のトップランナーを走ることができたのは、なぜでしょう？」

その秘密は、共通一次試験にあるのです。始めた頃は、評判悪かったんですよ、共通一次（入試センター）試験。偏差値で人間を評価するのかって。でも、やがて思ってもみなかった現象が起きたのです。偏差値的に見てもっとも厚い層を形成する学生の学力が、ドバーンとアップしたのですね。

なぜか。共通一次試験の一番の特徴は、教科書に準拠した試験問題ということです。クイズもマツ青の難問や奇問をなくした結果、特別な暗記能力を必要としなくなりました。まあフツーに勉強した子なら六〇点くらいはとれるし、バッチリした子なら満点がとれるわけです。

結論をいえば、日本という国が、教育の名のもとに、組織的に情報化社会に適合する人間をつくるようになったというわけなんです。

△情報を自在にあやつり創造力を発揮するには哲学的思考が不可欠

情報化社会とは情報過多の社会でもあります。ものすごい量の知識と情報が、ものすごい速さで生産され動いていきます。流動する情報を素早くキャッチしなければなりません。

でも、情報をただたんに型通りに処理したり受けとめるだけなら、そんなことは機械がやるし、一方的に受け身なだけなら、情報化社会なんてクソ面白くもない、味気ないだけです。

さあ、そこで必要になってくるのが、少し前にいったような、情報や知識を自在に操作・管理し、それをもとにして独創的な考えができる人なわけです。

おまたせしました。

ここで、哲学がやっと登場いたします。哲学とは、一言で言って、たんに考えることではなく、「自由に考える」ことです。

知識や情報を自由自在にあやつって、オリジナルなものをクリエイトするためにこそ、思考が働かねばならない時代なのです。この情報社会で、はじめて、多くの人（大衆）が、非創造的なことは機械にまかせ、自由に、独創的に思考することの楽しみを味わうことができるようになったのです。

哲学が、コンピュータ時代の今こそ求められ、かつ大きな力を発揮するということ、おわかりになったでしょうか？

△哲学はよそ行きの正装ではない おしゃれでカジュアルな軽装なのだ

哲学というと、なんだか難しそうですよね。わかりきったことをこねくりまわして、ことさら難関にするといったイメージがあるかもしれません。教科書の哲学者の顔がどれもこれも深刻ぶっちゃって、特別な人、もしくはヘンなオヤジ、はたまた指名手配の凶悪犯ってな感じです。

でも、彼らにも同情してあげてください。彼らは知を限りなく愛し、膨大な量の知識をインプットした蓄積者だったのです。そしてその知識を駆使して考えに考え抜きました。実に苦しい作業です。そして、その蓄積し、熟練した思考の伝承者でした。

それで、あんなになっちゃったんですね。彼らは知的エリートとして、一般の人になりかわって「考える」人たちだったわけです。

でも、今や情報化社会です。知を愛するためには、膨大な知識をためこむ必要はありません。

いってみれば、哲学は、知のエリートが独占した「秘技」から、誰でもが活用できる「技術」に転化したというわけです。もののしい羽織袴が、カジュアルに、オリックスのイチローのファッションみたいになったわけです。

情報化社会は「軽薄短小」の時代だと揶揄する人がいます。「軽薄短小」に哲学はない、なんていう人もいるけど、冗談ではないですよ。

「軽い」ってことは、自分という存在を「世界の中」に置くことができる感覚のことなのです。どこの国の誰とも、同じ人間として自在に考えあえるのです。

哲学するとは、国や地域の垣根を取り払い、カジュアルスタイルでつきあいのできる人間、「世界に通用する人間」になることなのです。

＃２ 哲学は、もっとも古く、もっとも新しい人間の必須科目である

＃１をもう少し詳しくするような形で、若い学生たちに、特に大学教育のなかで、「哲学とはなにか？」を語ってみます。

△哲学は人間社会の総合科目である

人間社会にはさまざまな学問があります。大学にも、経済学、法学、物理学…とあり、学部、学科、専攻に別れています。そして、それぞれの学問は、幾重にも細分化し、専門化され、どんどん高度化してゆきます。

しかし、その中で唯一、細分化と専門化とは逆の道を進むのが哲学です。経済学には経済哲学が、医学には医学哲学があります。文学には文学哲学はありませんが、名前だけのことで、文学に文学原論を求めるのは哲学的試みだといっていいでしょう。

すべての学問の中に、もっと広くいえば、すべての思考の中に、哲学が息づいているのです。競馬や恋愛の哲学だってあるでしょう。

ところが、学問として大学で通用している哲学は、すべての学問の基礎がそうであるように、想像を絶して無味乾燥です。哲学科では、哲学書を原典で読むための知的訓練が第一なのです。大学で哲学を専攻し学者（研究者・教育者）にでもなろうと思うほどの人は、外国語の文献を読むことを避けることはできないと思ってください。

しかし、哲学を自分の学問上、仕事上、人生上の「糧」にしようと思う人は、大学の専門哲学にとらわれる必要はありません。自分の思考にかなった哲学者や思考の流れを必要におうじて摂取し活用することができます。

ただ、あなた方が進む大学に、あなた方の要望にこたえる哲学の教師がいるのかどうか、保証のかぎりではありません。いないときは自学自習するほかありません。

でも、哲学は、自学自習こそがその本来の姿勢なのですね。独習なくして自立した思考は困難です。

△哲学は情報社会の必須科目

哲学は、ギリシアに端を発したといわれていますが、あらゆる学問の中でもっとも古いものです。

すべての学問（サイエンスというのですから科学と同じ意味です）は哲学から分岐してゆきました。科学（sciences）とは、文字通り、分科学のことです。

しかし、哲学から独立したそれぞれの学問が勢力圏をのばしていったのに対し、「大学での哲学」はどんどんその力の及ぶ範囲を小さくしてゆきました。哲学の中には、たしかに、十分に鑑の生えたもの、自慰行為と呼ぶしかない教育研究にすぎないものもあります。

しかし、哲学は人間にとって不要でないばかりか、学問にとって無用になったわけではありません。哲学は、諸科学や技術の革新・飛躍におうじて、繰り返し、自己革新を遂げてきました。

たとえば、現在、日本をはじめとする先進国は情報社会のまっただなかにいます。コンピュータ社会ですね。コンピュータは単なる計算機ではありません。思考機械です。人間が苦手とする合理的計算や暗記・記憶を大量・迅速・正確に処理してのけます。

情報社会は、言葉の社会です。誰もが自在に言葉を駆使する社会です。人間が、計算と記憶をコンピュータに任せ、創造・想像的な思考に専心できうる時代になったのです。

人間が自立的に考える時代が情報社会の特長なのですね。つまりは哲学が、少数の風変わりな人々の営みとみなされた時代から、誰もが創造的な思考＝哲学を必要とする時代になった、ということです。

私は、コンピュータ思考が、いまはじめて登場したのではなく、プラトンやデカルト、ライプニッツやソシュールに見いだすことができると知りました。そして、パソコンを使いはじめて、私の知的生産力が倍加したのは、偶然ではありません。哲学が情報社会の知的武器になっているのですね。

△哲学は人間通の宝庫

しかし、哲学が特に人間にとって必要なのは、哲学の歴史が人間通の宝庫だということにあります。

「人間通」というのは司馬遼太郎さん（歴史小説家）の造語ですが、人間と人間世界（世間）にどのような理解を示し、態度をとったらいいのか、に精通する能力のことです。

哲学は、人間いかに生きるべきか、という人生論的問題だけを含んでいるわけではありませんが、どう生きたらいいのか、こんな場合どう考え、判断し、行動したらいいのか、を広く深く考える学問分野は、哲学以外には「文学」しかありません。

特に、これから実人生を迎えようとする大学生にとっては、切り離しえないテーマが人生論ですね。

私は、司馬さんの小説から「面接の達人」の中谷彰宏さんまでをカバーする人生論的テーマを、

哲学がもっといきいきと伝えることができたなら、と考え続けています。

△哲学は国際社会の共通科目

ヨーロッパの大学や高校では、哲学がもっとも重要な科目であり、大学資格試験でも、もっとも重要な科目であるということを知っていますか？ いろいろな原因がありますが、ヨーロッパが歴史上一つの国際社会であることと関係があります。

哲学は、イギリス国民やスペイン国民としてではなく、「人間」として、国際人として共通に持つていなければならない知的教養のことなのです。

その意味で、哲学の具体的内容は、個人の心や行動に深く関係しますが、人類として共通に持つ必須物のことなのです。

大学とは、民族や地域特有のことをだけではなく、世界に共通なことを学び研究する場所なんです。日本の大学もアメリカの大学も、インドの大学も、たとえそこで用いる言葉が異なっても、共通の内容が教育、研究されなくては、大学とはいえないのではないのでしょうか？ つまり、人類に共通な哲学が、大学で重要科目としておかれている理由が、国際社会の今日、ますます大きくなることはあっても、減少することはない、というのが私の考えです。

3 日本の大学における哲学教育はどうあるべきか

では、日本の大学において、哲学教育はどうあるべきでしょう。以下は、私の経験則から導かれたものです。

△哲学教育の実状

「どうあるべきか」の前に、「実状」に触れておきます。以下、です、まず調をやめます。

- ① 大部分の大学に、「哲学」の授業はある。しかし、共通基礎科目、一般「教養」科目の一つとして、ほとんどはあってもなくてもいいような形で、「片隅」に存在している。共通基礎科目で、専門的な哲学知識をベースにした教育は、ほとんど不可能である。しかし、もちろん、自分の「専門」と称するものを、まったく一方的に論じている「豪傑」もいる。
- ② 文学部やそれに近接した人間科学部等には、哲学科や思想関連の科目群が存在する。そこでは、哲学科に学ぶ・哲学を履修する学生と、哲学を研究教育してゆく学生が、教育の対象になる。教育は、主として、後者向けに行われる。
- ③ 哲学科やその関連科目群の大学院では、名目上は、哲学研究・教育者養成のための教育が行われる。

しかし、いずれの場合も、哲学教育は、それを担当する教師の全くの「自由」裁量にまかされている。カントをドイツ語で読む一般教養科目が存在する反面、新聞の切り抜きをつかって現代思想を解説する専門科目がある。どちらが、よりすぐれているか、等というアприオリな評価軸はない。つまらないあるいは無能な教師に当たったら、不幸、で終わりだ。

△2極への分化を想定する

「どうあるべきか」は「実状」(現状)の批判的検討から導き出されなければならない。しかし、まず、実状との関連を考えながら、理論的な抽象をあえて行ってみよう。対極の2形態を抽出する行き方だ。

△△伝統的な行き方

一方は、伝統的な行き方の踏襲である。「歴史」の蓄積というのは、馬鹿に出来ない。とくに教育においてはそうである。簡単にいえば、そのときどきの学生の程度とか興味にあわせて、内容を選ぶのではない。過去数千年、哲学教育が培ってきた内容を教授する。中心は、いうまでもなく、哲学史である。それをベースに、存在論、認識論、実践論という基礎領域に論究がすすみ、そして、論理学、自然哲学、人間学、社会哲学という大きな学的領域区分と、さらには、各個別科学にそくした「専門」に分化した学的領域が、教授対象になる。

この行き方を、現状との関連で実行しようとすれば、こうなる。

- ① いわゆる一般学生を対象に、「哲学概論」風の、哲学の領域をひとあたり、さっとなでるような講義を行うことである。20 年前までは、このような授業が、必ずあった。
- ② 主として、哲学を専攻する学生、ないしは、哲学に強い関連のある領域を専攻する学生向けのもの。担当する教師の個人的な研究成果が、もっぱら教授される。例えば、「デカルト哲学」というような個別研究、あるいは、科学的な「認識論」というような領域研究、さらには、美学とか生命論というような個別科学に即した研究の成果が、教授される。これが、過去においても、現在においても、主流である。
- ③ 哲学研究者になろうとする学生向けのもの。本質的には、②と変わりはない。学生・大学院生の受けとめ方の違いがあるだけだ。

△△実状を肯定した行き方

- ① 一般学生向けには、現代社会、とりわけ若者たちに関心のある「テーマ」をその都度取り上げ、「哲学」的に解説する。これは、簡単なようだが、なかなか難しい。学生の関心を引くような仕方では 1 年を消化できる教師は、稀である。
- ② 20 年前まで、哲学を専攻する学生の研究課題で、「現代」哲学というような「評価」の決まっていないものを選ぶことは、認められなかった。

私の出た大阪大学哲学科西欧哲学の領域では、研究課題はデカルトとカントに決まっていた。大学院に入って、研究教育者になろうと思うものは、それ以外では卒業論文を受け取ってもらえなかった。つまり卒業ないしは大学院入学を拒否された。

しかし、今は、フーコーというような「現在」の思想家を対象にしても、「セクシャリティ」というような超現代的・超学的テーマを選んでも、かまわない、というのが主流である。もちろん、担当教師の研究領域と重ならなければ、指導は見込めない。勝手にどうぞ、というわけだ。

△「真理」は真ん中にある？

「どうあるべきか」は、つまりは、「理想」は、可能的現実の中にある、というのが私の考えだ。極端の「中間」に針を合わせた方がいいのでは、といたい。それが、つまりは、私が「実験」している、あるいは、そのような立場に立ったなら、実行したい、という行き方である。

- ① 一般学生向け。全体を、通年、25 回の講義とする。全体を、4 部構成にする。
 - a 「哲学の歴史を学んでみよう」(テーマは、むかし哲学は万学の女王であった・哲学が科学の下僕になったとき・科学技術の発展が哲学を呼び戻した・哲学の時代がやってきた)
 - b 「哲学で普遍的なテーマを考えてみよう」(幸福・政治・経済・湾岸戦争・社会主義)
 - c 「哲学でフツウの人間生活を考えてみよう」(家族・環境・生命医療・世代・労働論)

- d 「哲学でスキャンダラスな世相を考えてみよう」(人はなぜ、酒を飲むか・フォーカスを好むか・いたすか・盗むか)

主眼は、「哲学はコンピュータ時代によくあう」という哲学に対する全体評価の上に立って、「哲学は何ぞや」という形で哲学自体をなぞるのではなく、様々な問題領域を哲学的思考で「歩く」ということにおいている。これは、『哲学がわかる事典』(日本実業出版社)で見本を示した。好評である。(ただし、私は、毎年、おおよそこの4領域に意識的に区分して、講義内容を全面的に変えている。2003年度から半期制になったので、形式的にはきわめて都合よかった。)

- ② 哲学専攻の学生向けの授業を担当した経験はない。(しかし、哲学専攻生、哲学研究教育者の若手を、個人的な研究会を開いて、指導した、あるいはともに学んだ経験は、豊富にある。)

この学生向けの授業でもっとも大切なのは、「テキスト」の読解力(もちろん、語学的能力も入る)である。いかに大量の文献を収集し、読み抜く習慣をつけるか、がキイポイントになる。カントも読めない学生は、駄目かもしれない。しかし、カントしか読めない学生は、もっと駄目だろう。

私なら、現代日本と世界の「思想」を徹底的に学ぶ習慣をつけることを、必須の課題とする。ギリシア哲学を専攻しようが、中世思想を論じようが、「現代」(「現在」Gegenwart)に対する深く柔軟な思考がなければ、「歴史」の成果に届きかねる、というのが私の経験である。

その際、とくに重要になるのが、現代日本の哲学・思想家群のリストアップと論点整理である。現在、生きてある哲学者たちと共有できる課題設定や思考能力を身につけるためである。

- ③ 哲学の研究教育者になろうとする学生・大学院生の授業担当経験はない。(ただし、哲学を専門授業としている人を「教え」た経験は、むしろ、多くある。)

「教育」の最大のポイントは、哲学的思考を表現する能力をつけることである。狭義には、「論文」を書く能力の養成である。この点では、哲学も「文学」である。言葉で表現する技術である。

そのために、担当教師の主な仕事の一つとして、学生の研究論文の発表場所を確保したり、あるいは、媒体を紹介する仕事がある。さらには、就職の世話である。これも、大学教育の重要な一環である。

△教師のレベルアップが肝心

人生の「特定」時期に、「強制」されて、「特殊」なことを持続的に学ぶのは、考えている以上に重要である。つまりは、どんなにつまらなく思えても、大学の「授業」は、きちんと通過した方がいい、といいたい。他では経験不能なのだ。

しかし、その重要さが実感されるのは、大学生であることをやめた後である。「後の祭り」なのだ。したがって、教育は、どこであれ、予想以上に、「効果」薄く、「稔り」大きいものである。

この点でいえば、私個人は、「教養」としての哲学教育の意義は、これからますます大きくなることはあっても、小さくなることはない、と考えている。しかし、そのためには、哲学教師たるもの、少なくとも、ヘーゲル程度の課題の広さを持ち、それを自在に展開できるための激しい知的トレーニングと成果獲得が必要になる。「百科全書」家になる、百科全書的哲学書(テキスト)を書く必要がある。雑学の徒、といってもよい。つまり、重要なのは、教師の能力アップにつけている、ということだ。

どんな「偉大」なテーマを掲げても、どんな御託宣を述べても、硬直した「馬鹿」や、学内行政にうつつを抜かず教師からは、まともな授業は期待できないのである。とくに、哲学はそうだ。いっ

てみれば、哲学は2千年以上の歴史をもっているのである。そこで活躍した思考者たちは、彼らの「現在」を激しく生き抜いた思考の「技術者」であった。私たちが、真似すべきは、「現在」を思考の技術者として生き抜く力を示すことである。

△大学でしかできない哲学教育

もちろん、哲学教育は、大学だけが行うのでも、行いうるのでもない。多くの哲学者たちは、大学の外で、教育を行ってきたのである。「学校哲学」とは、スコラ哲学という意味を持っており、歴史的にいえば、「教義を独断的に教えるシステム」を指している。

しかし、大学でしかできない教育はあるのだ。

考えても見たらいい。哲学を曲がりなりにも習得した教授や助教授たちが、教えてくれるのである。彼らを個人的に雇うとなると、とてつもない費用がかかるのだ。どんなにつまらない、テーマ、授業、人間でも、他の手段では獲得できないのである。それを、自分の方から拒否する必要はない。馬には乗って見ろ、である。したがって、「馬」に乗せる技術が必要になる。

かつて学部専門の演習の大半は、ほとんどが、語学の演習である。2時間で、数行しかすすまない、ということもある。それも、ほとんどが、「古文」である。ドイツ人だって読めないカントを、読もうとするのである。難解であり、面白くなく、徒労である。しかし、こんな授業は、大学の演習以外では、決して受講できないのである。私なら、何が何でも、受講すべし、といいたい。

逆に、どんなにすばらしい授業でも、その人の著書を読めば済むような授業は、これは遠慮していい。もちろん、テキストをなめるように読んで、お仕舞い、というような教師は、ボイコットした方がいい。

哲学は、「対話」である、といったのは、プラトンだけではなかった。演習を討論とか対話に費やす授業も多い。それが本来の演習である、と考えてもいい。しかし、対話や討論のためには、十分な準備が必要なのである。視聴者参加番組のようなものでは駄目なのだ。少なくとも、討論のための材料、主張のレジメ提出、というような準備が必要である。この点、大学は、あくまで、カルチャーセンターとは違うのである。独立した「思考」者として参加する、これが演習であり、そして、大学が提供できる固有の授業である。

4 ビジネスとしての哲学

哲学をビジネスとして生きるのが、大学の哲学教育研究者の一面である。ビジネスとしての哲学を正面に見すえて、教育研究に当たらないと、重要なものが見失われてしまう、というのが私の年来の考えである。

以下は、問題提起的な私的エッセイの類である。

△知を愛する、知に淫する

競馬の哲学がある。もちろん、笑いの哲学はある。ベルグソンという正真正銘の哲人が『笑い』（岩波文庫）という一冊を書いている。それに、言語哲学者ウンベルト・エーコの『薔薇の名前』（東京創元社）だって、アリストテレスの『詩学』の書かれざる章「笑い」を隠れた中心概念にすえおいたスリラー仕立ての哲学小説であった。世界各国後に翻訳され、ベストセラーになった。（もっとも、何人読み通したか、読み通した人でも何人著者の意図を理解しえたか、哲学研究者以外には「？」だったのではないだろうか？）映画化されたとき、燃える図書館から蔵書を必死で持ち出そ

うとするショーン・コネリー演ずる修道僧の言動は、まさに知に淫した者のものだった。

万引きの哲学だってあってもよさそうだ。「マージャン放浪記」の阿佐田哲也ならマージャン哲学を立派に書いていただろう。(実際にあるのかもしれない。)

哲学という言葉は「知を愛する」が原義だ。競馬を、一か八かの賭事としてではなく、純粹に知的に愛する対象とみなすなら、立派に競馬の哲学が成立する、というのが私の意見だ。

そういえば、私がずーっとなりたいたいと思ってきたのが、競馬評論家である。大学の時、大阪外大の教授で、ロシア文学の研究家、「立派」なマルクス主義者であった法橋和彦先生が、スポーツ新聞に競馬のコラムを連載していた。傍目に見ても、かっこよかった。法橋さんも、いささか、私たち無垢な коммуニストの卵を前に、得意そうであった。もっとも、法橋さんの研究対象であったドストエフスキーは度はずれたギャンブル好きであったし、法橋さんも蒸留水の入った魔法瓶持参で、阪神競馬場や京都競馬場へ「出勤」していたのだから、まあ、哲学的興味だけから、競馬をやっていたのではなかった、と見た方がいいだろう。

私は競馬場へ行ったことがない。馬券を買ったことがない。パチンコだってしたことがないのだから不思議はないのだが、しかし、知的な対象としてなら、競馬のテレビ観戦は欠かしたことがなく、一般紙の競馬欄は熟視するし、時には飲み屋の隅に置いてある競馬新聞をかなり熱心に読む。競馬をネタにした映画や小説は、むしろ大好きだ。競馬関係者や競馬愛好家が話したり、書いたりしたものに、興味が湧く。

なぜか。いつか、競馬「評論」(コラムやエッセイを含む)を書け、という注文があると強く予測しているからだ。残念ながら、世に慧眼の士はいないのか、その声はいまだかかってきてはいない。どうでもいいことだが、私が知的に「愛」した馬は、エリモジョージである。トーショウボーイ、テンポイント、グリーングラス等の駿馬と、あの小さい体で覇を競った。同じ理由で、釣りやプロレス、駅伝や食べ歩きを優先的に見る、読む。

そんなわけで、私は、なんに限らず、「現物」ではなく、現物にたいする知的愛に執着してきた。いま流行の言葉でいえば、バーチャル・ライフである。スーザン・ヘイワード主演の「悲しみは空のかなたに」という映画の原題が「Imitation of Life」で、女優と黒人のメイドとの友情のありようにいたく感動したが、「模造の人生」という題に惹かれた。つまり、プラトンの「イデア」にたいする「イミテーション」である。イデア＝観念＝真実、マテリアル＝もの＝模造(模倣)を想起したからだ。プラトニック・ラブというのは、後に人口に膾炙されたもので、精神的愛を指していわれるが、いうまでもなく、世界にただ一對しか存在しないベター・ハーフどうしの愛のことで、現実の模倣＝仮想世界では存在しない真実＝観念＝精神の愛のことである。

現在、現実＝真実、観念＝イミテーション＝バーチャリティとごく単純につかまれている。しかし、観念を持つ存在、観念で対象をつかむ人間においては、ことはそんなに単純明快ではない。「玩物喪志」という。物に憑かれて虜になり、精神を忘れることだ。玩志喪物ということもあろう。それが、人間に、否、知を愛するものにふさわしい態度である、と私は考えてきた。人間は、頭で満喫する、舌で、胃で満足する前に。しかも、頭での満喫には、かぎりがない。知を愛するとは、知を限りなく追求することと別物ではない。

△職業としての哲学

しかし、プラトンやアリストテレス、カントやヘーゲル、西田幾多郎や三木清、哲学者と呼ばれ

る種族のほとんどは、「哲学」を職業としていた。プラトンやアリストテレスは、私塾の先生だったし、西田は官学、三木は私学の教授だった。現在、日本に、大学だけで、千数百人の哲学教師が存在する。ちょっとすごい数だ。かくいう私も、非常勤で5年、常勤でほぼ30年、哲学を教えることで生活の糧を得てきたことになる。

大学に入って、専門課程に進み、哲学科の教授と相まみえたとき、異口同音にいわれたのは、フィロソフィーレン philosophieren することが肝要なのだ、ということだった。「哲学する」とは、しかし、どういうことか。哲学によって生きるということではなく、例えば、哲学を講じて生活の糧をえることではなく、哲学を生きるということだ、という意味らしい。「哲学を生きる」、実にカッコいいではないか。でも、私が出会った哲学教師たちのほとんどに、「哲学で」生きている人は存在するが、「哲学を」生きている人は存在しないようなのである。

しかし、そもそも、哲学を生きた人とはどんな人のことか。プラトンやヘーゲルは、哲学教授を収入源として生きた。デカルトは教授ではなかったが、哲学知を愛好する強力なパトロンの庇護の下でたつきを得た。大商人の息子として生まれ、大学教授の招聘を断って、遺産で生きたといわれるスピノザでさえ、パトロンの有力政治家がいたし、年金のような仕組みで生活の資を確保してくれた有徳の「友人」たちがいた。彼の哲学上の「意見」を期待してのことである。スピノザは「代価」を期待したわけではないだろうが、代価をえた。

想像するに、「哲学を生きる」とは、すなわち、純粹に知を愛する生き方を貫くとは、社会上の、家族上のどんな制約も受けずに、「暇人」として、あるいは、「余計者」として生きるほかないのではないだろうか。「修道士」「学僧」としての生き方である。そういえば、「スコラ」とは、「スクール」(学校)のことだが、「暇」という意味だ。哲学を、それ以外いかなる目的も持たない暇つぶしとして生きる、これが、私の教師たちがいった「フィロソフィーレン」の意味なのだ、という結論に私はとりあえず達した。

しかし、私が読んだり直接目にする哲学者(と称されている人たちは)、哲学で食べるだけの人がほとんどである。哲学教授が唯一の生活手段である、という人たちがばかりである。むしろ、彼らは、哲学以外で稼ぐと、俗物の手に落ちた、などといった軽蔑の感情を露わにする。

「朝日新聞」のコラムを五回書いた、余禄が入った、こんなものは飲み食いするにしくはない、じゃんじゃん食え、飲め、といった先生がいた。気前はよかったが、何か汚いものに手を突っ込んだような表情をしていた。(もっとも、内心では、どや、朝日で書いたんや、朝日やでよ、と自慢たらたらの心情が透けて見えたが。)

もちろん、哲学教師は、大学で教えるだけではない。(といっても、教えてもらいたくない教師が大半を占める。ちょっとこわい集団だ。)研究者でもある。研究活動がその「仕事」の一要素でもある。といっても、ペーパー(論文)を書くことだ。論文を書かなければ、研究活動をした証にはならない。肩身が狭くなる。

しかし、私の講座の先生であつた相原信作教授は、「10年に1本書けばよろしい」といい、かつ実践されていた。豪傑である。普通は、一年に原稿用紙で50枚(四百字詰)のものを1本書けば、御の字である。書いたものは、大学の各学部、あるいは、学科で出される「紀要」(bulletin)に載せられる。ほとんど、出せば載る。(一度など、今度私書きませんから、鷲田さん、私の書くスペースをお譲りしますから、心おきなく長く書いてください、なんていわれたことがある。これが平等原理

の「民主主義」というものらしい。)

ところが、これ、書いた本人以外はほとんど読まない。(本人だって読みたくないだろう。) ほとんどはゴミの類といってもいい。しかし、日本の大学業界では、これが堂々「業績」(works)としてまかり通り、4ないし5本たまったら、教授昇格の資格がつくのである。(驚きだろう。こんないい昇格システムの職業はない、と思わないだろうか?)

しかし、この程度さえの「論文」さえも書かない、書けない教師が多いのである。

私の見るところ、我が先生たちが宣った「哲学を生きる」、つまりは、「暇を生きる」を、我が哲学教師たちが忠実に実践しているのである。

△ビジネスとしての哲学

プラトン先生は、学問塾(アカデメイア)を開設し、学生たちを教えた。しかし、これは、立派なビジネスではないだろうか。私は、「さすがだなー」と感心してしまう。その上、プラトンは、自分の哲理を实践するため、弟子たちに、自分を政治顧問として再三「売り込んだ」のである。ただし、大先生の政治指南は惨憺たる結果に終わったが。

ライプニッツは、提供された大学教授のイスをけて、大名(ハンノファー公)の政治顧問におさまリ、ヨーロッパを股に掛けて活躍している。出る杭は打たれるの通り、殿様がイギリス国王(ジョージ一世)に迎えられたとき、微積分の発見を競ったニュートン一派の反対に遭い、ライプニッツは国王とともにイギリスの地を踏むことはできなかった。

文字通り、哲学でビジネス(まで)を生きたのが一八世紀に活躍したイギリスのヒュームで、経済学の父といわれるアダム・スミスの兄貴分だ。ヒュームは、再三の教授就任のチャンスをその「異端」的な学説のゆえに逃しはしたが、軍事使節副官、フランス大使代理、国務次官などという「官職」を歴任する傍ら、著作活動の成功によって印税による「恒産」を獲得し、文字通りの「フリー・シンカー」として生きた。「独立思想家」とは、国や教会、どんな団体や個人にも左右されずに、筆一本で立つ、言論を張ることのできる資力(資産)をもった人のことである。インディペンデンスである。

哲学は、ビジネスをもその対象にする。ビジネスをするための哲学ではなく、ビジネスを知の愛の対象、思考の対象とする、という意味だ。これはこれで、とてもおもしろい。「ハーバートビジネス」などという雑誌がおもしろくないのは、あまりにも、ビジネスに密着しすぎているからだ。こうしなければ生産性が上がらない、こうやって儲けが3倍になった、等ということに関する記事ばかりで、息が詰まりそう。しかも、「文学」でない。読んでも砂を噛むようである。

残念ながら、哲学を職業とする人たちから、哲学をビジネスとする人はほとんど生まれていない。しかも、哲学教授たちは、哲学で金儲けするとき輩を、哲学者仲間から追放処分にしたい、と思っている。

でも、哲学は立派にビジネスの対象になってきたのである。資本主義とはすべてをビジネス化するシステムである、といっているだろう。資本主義を否定するマルクス主義だって、それを研究したり、著述することで、ビジネスの立派な対象になってきた。だから、哲学教授でさえ、サラリーマンとして生きてゆくことができるのである。

2500年前、プラトンがビジネス化した哲学を、どうして、私たちの時代にビジネスの対象として悪い理由があろうか。

哲学をビジネス化するには、組織的な行き方と個人的な行き方がある。

前者として、私なら、ビジネススクールやロースクールの向こうを張って、フィロソフィスクールを作りたい。哲学ビジネスマンを創出する機関である。どんなビジネスマンを想定しているかというと、諸事万般に通じた才能の持ち主である。ゼネラリストの養成で、最も重要な科目が、人間の「知恵」の歴史だ。まあ、司馬遼太郎の歴史小説が必読の副読本というところか。最低限度、どんな職業についても、自力で生きてゆけるだけの「胆力」(courage)を身につける必要を教え込みたい。

後者としては、手っ取り早く、私が積み重ねてきた雑知を元本に、書いて、しゃべって、教えて、報酬を得ることである。こちらの方は実践中で、徐々にではあれ、芽が出てきつつある。間断なく注文が舞い込む。もちろん、安くても文句はいわない、否、いえない。

というわけで、哲学はビジネスとして、困難だが、不可能ではないし、おもしろいというのが私の暫定的結論である。これは、哲学教師を墮落させるものか、広く新しい能力の獲得にいたらすのか？ いずれかかは、ひとさまがまだ、哲学知をビジネスの対象にできるほどになれば、教養としての哲学を有効かつ精力的に教えることはできないだろう、と私は確信している。

§2 教師たちに

ここでは共通基礎科目としての「哲学」教育について語りたい。ただし、以下はすべてテーゼ集である。

#5 なぜ哲学テキストが必要なのか？ 重要なのか？

特に重要と思える三点について述べよう。

△考える力は読む力から

- ・考える訓練を受けておらず、考えることを自覚的に欲していない人を、ともかくも「哲学」までつれてくるためには、「案内」が必要だ。
- ・考える力とは、基本的には、読解する力で育つ。筋道をたどって考え抜く最小限度の案内を与えるために、テキストが必要だ。
- ・テキストをあらかじめ読ませることで、授業の準備モードにはいることができる。これがないと、手ぶらで拝聴、ということで、教室をでれば、内容はすべて雲散霧消する。

△テキストは「地図」(案内板)である

- ・ノートを読むように、テキストをなぞるような授業は、不必要である。
- ・テキストは、いわば案内のための「地図」である。授業は、実際の地形を歩くことだ。山坂があり、立ち止まって検分しなければならない危険地帯があり、瞳を凝らして熟視し熟考しなければならない史跡がある。それらの難所や名跡を、学生とともに歩むのである。
- ・テキストを、頭から最後までやる必要はない。重点配分で行くべきだ。しかし、テキストがあれば、学生は、とぼした箇所を自分で読んで、最低限度の内容を確認することができる。

△テキスト作成は、教師の力を飛躍させる

- ・ものを考える力、読解力は、書いてみてはじめて実効あるものとなる。読んで理解不能なものは、

「哲学」とは無縁である。

- ・書いたものが公開され、評価を受ける。授業が、有効か無効か、有益か無益か、有利か有害かは、テキストによって、明らかになる。
- ・テキストが、学生によって「読み物の対象」になるためには、それが「文学」にならないといけない。教師は、そこまで、考える力、書く力、語る力をつける必要がある。その良否は、脚本＝テキスト次第である、といっても過言ではない。これ、FDの基本ではないだろうか？

6 テキストの類型と内容の前提になるもの

△実際に教えるかどうかにかかわらず、西洋哲学史は必須である。

- ・教養の哲学といえども、恣意的なものであってはならない。哲学（学問史）を踏まえたものである必要がある。
- ・従来の哲学の歴史は、アリストテレスの哲学定義に影響されて、認識論＝科学としての哲学に重点が置かれてきた。存在論、とりわけ、人生論が視野の外に置かれてきた。
- ・人生論を、哲学の欠かすことのできない構成部分にするようなテキスト叙述が必要である。拙著『はじめての哲学史講義』（PHP新書 2002）で、不十分ながらその概要を示した。構成は次の通りである。

0 哲学史とはなにか

1 古代の哲学 自然の哲学

1.1 自然の哲学

タレス／ヘラクレイトス／デモクリトス

1.2 人間の哲学

ソクラテス／プラトン 1 2 / アリストテレス 1 2 3

1.3 人生の哲学

エピクロス／ストア派／キケロ

2 中世の哲学 神学の哲学

パウロ／アウグスティヌス／トマス・アキナス

3 近代の哲学 認識の哲学

モンテニユー

3.1 理性の哲学

デカルト／ロック／カント 1 2 / ヘーゲル 1 2

3.2 感性の哲学

スピノザ／ヒューム／ルソー

3.3 実証の哲学

ベンサム／コント／スпенサー

4 現代の哲学 存在の哲学

4.1 実存の哲学

キルケゴール／ヤスパーズ／サルトル

4.2 存在の哲学

マルクス／フロイト／ニーチェ／ハイデガー

4.3 「経験」の哲学

ジェームズ／フッサール／メルロ＝ポンティ

5 現在の哲学 構造の哲学

5.1 言語の哲学

ソシュール／ヴィトゲンシュタイン

5.2 構造の哲学

レヴィ＝ストロース／フーコー

5.3 脱構造の哲学

以上だが、まだ、「人生哲学」の位置づけは不十分である。

△哲学の構成部分は哲学史から出てくる

- ・「はじめにすべてがある」といわれる。しかし、「すべて」というのは、はじめから現在までを貫くものである。たとえば、カントを認識哲学を代表するパーソンとして取り上げることができる。同時に、カントのなかに、存在哲学と人生哲学を「発見」することは可能である。重要である。
- ・哲学史の「はじめ」で、「自然哲学」と位置づけられているソクラテス以前の哲学者たちは、なによりも人生哲学者であったし、認識哲学者でもあった。
- ・木田元さんは、存在哲学を、ミッシングリングとして、『反哲学史』を書いた。その例に倣って、人生哲学を失われた環として、哲学史を書き直さなければならない。(特に教養の哲学にとっては、不可欠である。)

△日本の哲学を教えることは欠かせない

- ・西洋哲学史の再構成とならんで欠かせないのが、日本哲学史である。哲学は西欧生まれだが、西欧の特権物ではない。
- ・哲学者を中心とした哲学史ではなく、哲学思考に資することのあった人と作品を取り上げて論じるところを基本とする、というのが私のプランである。
- ・現在と将来にわたる課題として、「日本人の哲学」を書かなければならない。基本プランは次のようだ。(※各時代・時期の中心的思想者を抽出する。たとえば、)

- 1 哲学者列伝 ※戦後なら、吉本隆明、小室直樹、丸山真男、司馬遼太郎、山本七平というように。
- 2 文芸の哲学 ※戦後の評論の領域では、加藤典洋、伊藤整、山崎正和、福田恆存、もちろん、戦前も、明治期も、江戸期もある。
- 3 政治の哲学 ※戦後の学者の領域では、北岡伸一、中川八洋、松下圭一、丸山真男
- 4 経済の哲学 ※戦前期の学者・評論家では、高橋亀吉、石橋湛山、山田盛太郎、横井時敬
- 5 歴史の哲学
- 6 人生の哲学
- 7 雑編
- 8 哲学の哲学 ※哲学研究者の哲学

日本の哲学は、日本の歴史が膨大な富に満ちているのと同じように、格別に豊かである。まだ部分的にしか仕上がっていないが、おそらくここ5年くらいのロングスタディになるはずだ。

7 哲学テキストの具体

6 を踏まえて、私が構想する教養＝基礎共通科目である哲学のテキスト具体像は次の三種類になる。

△人生哲学

- ・教養＝一般教育における哲学は、人生＝人間論を中心にする。
- ・存在論と認識論は、人生＝人間論の基礎づけ、あるいは説明原理とする。
- ・人生＝人間論の再定義が必要になる。
- ・人生＝人間論を組み込んだ哲学史の最低限の説明が必要になる。

△臨床哲学

- ・臨床哲学とは、現代人の、とりわけ学生の、日々生じる現実の悩みに直接応えるような哲学教育の実践であり、そのためのテキストが必要である。
- ・「何を学ぶか」「やりたいことはなにか」「どういう人生設計が可能か」等の、人生哲学の「各論」に当たる部分である。あるいは、環境論、生命倫理学、戦争論、家族論、性愛論、等々というような、現在がダイレクトに提起してくる問題がある。
- ・ある特定の地域や人々にかんする具体的問題、緊急に解答を迫られている問題から入って、誰にでも(万人に)関連ある問題である、というところまで詰めてゆく思考力が必要である。(*この準備もかねて、「北海道の知的財」とりわけ人的財に焦点を当てて、特論＝特殊講義を始めた。2003年は、総論を、2004年度は、萩原吉太郎と野呂栄太郎を取り上げた。)

△日本人の哲学

- ・グローバル時代に、日本人の思考を熟知し、身につける必要は、増えこそすれ、減じることはない。ここで、「日本」ではなく、あえて「日本人」としたのは、哲学も「文学」だからだ。書かれたものであり、書く作者(文学＝思考者)がいるからだ。作者＝思考者に焦点を当てた講義が必要だ。
- ・「日本に哲学なし」といった兆民とは異なり、日本にも、哲学思考者は存在する。ただし、「哲学者」(哲学専門研究者)という人々に限定した意味の哲学ではない。
- ・人生哲学とは、つまるところ、「生きてある人の哲学」である。たとえば、『暮らしの手帖』の花森安治に「生活の哲学」を読みとり、教え、応用することである。

△「哲学者」の著作紹介

しかし、哲学である。教えるかどうかに関わりなく、哲学者を、特にその主著を紹介することが必要だ。それも他人任せの紹介の引き写しでなく、自分自身の目で読み込んだ紹介である。(* 2004年度、その見取り図として、「超要約哲学」という書題で、100冊の哲学書を紹介した。一種のカatalogだが、「要約」が味噌である。これはとてつもないハードな作業になった。)

§ 3 教育実践の改革点

8 授業のサイズによって、授業のやり方が変わる

一般的に、600人以上の出席のあるクラスで授業をするのは、非常に困難である。これは、議論の問題ではなく、(300人以上)廃止の問題である。ただし、私のクラスは、2クラス(現在は4クラ

ス)とも、10年以上にわたって、600人以上である。したがって、数回で、出席数が半減する。最終的には1割近くまで落ち込む。しかし、これは、即刻、改善しなければならないし、改善できる。

△300人サイズ以下のクラス

- ・テキストの他に、授業進行の目安を示す、レジメを作成する。いってみれば、チラシと同じである。
- ・私語は、絶対、許さない。教室からの退場を促す。私語は、思考の、したがって、哲学の「敵」なのだ。
- ・教師に与えられた90分は、基本的には、残念ながら独演会である。学生に傾聴させる、これが基本になる。
- ・授業が一方交通的になる。その欠を補うために、必読文献を熱心に提示し、簡単に読みどころを解説する。
- ・評価に、面接を取り入れることは、ほとんど不可能である。ペーパーテストと小論文の組み合わせになる。

△100人サイズ以下のクラス

- ・レジメは、チラシではなく、問いかけであり、それへの解答を促すメディアである。
- ・最低、90分に5問、アトランダムに質問し、解答を求める。学生には、「黙秘権がある」などというものもある。たじろがないことだ。
- ・教師と学生とのあいだに、ある程度の意見交換が成り立つ。しかし、このインターコースをあまり過信しないほうがいい。重要なのは、基本文献の提示と読解を促すことだ。
- ・読書と読解がどれだけ必要か、を執拗に指摘する。この意味で、広く本を読む習慣のない教師は、失格と思いたい。
- ・評価に、簡単な面接を取り入れることが、可能になる。

△30人サイズ以下のクラス

- ・1回2人の割で、学生に課題を与え、調査し、公表させる、というスタイルが、ある程度可能になる。
- ・レジメは、学生に出さすこともできる。ただし、教師独自のレジメは、授業に出ると付加価値を得ることができる、という心理的な意味からも、必要だ。
- ・ディベートの敵は、おしべりの、チャットの会に終わることだ。やはり、学生は真摯に学ぶ、を基本にするという姿勢を、教師のほうは崩さないことである。講義は、ゼミナールではない。
- ・評価は、授業の実績で決めることが可能になる。

#9 成績評価でもっとも大事なこと

この改革点は、アメリカの評点至上主義に滑り込まない必要と、評点が学生の能力と努力を反映するシステムを開発する必要とを、両にらみしながら、模索しなければならない。まだ、これといった解答が出ていない、未解決で各種実験を要する問題領域である。

△試験による評価は必要か？

- ・私の直接調査と30年以上にわたる経験では、試験がなくとも、課業に励む学生は、皆無に近い。試験は、どのような形であれ、絶対に必要である。

- ・試験は、復習の「要約」である。授業が効果あるものになっているかどうかの、重要な指標である。
- ・しかし、試験は、本来求めているものにはなっていない。単位を修得するかどうか、それが現実の試験に対する学生多数の態度である。

△社会が、就職試験で、学生の評点を重要視しないことに対して

- ・評点と、本人の能力や努力とはあまり関係ないという「通弊」を打破しなければならない。学ぶ意欲の増進のためには、社会が学生の成績を、いまよりもずっと重要視する必要がある。
- ・大学の評点と会社の評点とが、少しでも近づくことができるような相互交流研究が必要である。ただし、ここでも難しいのは、普通一般に考えられているのとは逆で、大きくいえば、大学入試の偏差値が、会社での実績にほぼ見合うという「現実」である。なぜそうなのか、の基本は把握できている。だから、偏差値など会社評価に関係ない、などと無責任にはいえないのである。
- ・重要なのは、大学の評価を抜きに、企業等が偏差値によって学生の能力を評価しても、大きな齟齬がない、という現実をどうやって突破するか、である。

偏差値は、大学にはいるまでの「集中力と持続力」の養成程度で、つまり、熱心に受験勉強したかどうか、で大枠決まる。高校まで勉学に集中し、それを持続する力をもたない学生が、大学で熱心に学ぶスタイルを身につけなければ、会社に入ったのちも、「集中と持続」を発揮すること、困難な仕事をやり抜くことは難しいのである。

大学では、思考の集中と持続を養成する課題を最も重要なものとする必要がある。そのために、哲学が必要である大きな理由でもある。

△厳しい評点をすれば、履修者が減ることに対して

- ・厳しい評点とは、4段階評価を厳正にすることではない。欠点者を多く出す、ということである。教師が要求する基準に到達するかどうかで評価をすれば、少なくとも私が教えている大学では、ほぼ半数は欠点（D評価）になる。
- ・厳しい評点をすれば、ある程度、意欲のある学生が履修する。当然、履修者数が減る。効果的な教育が可能である。教師個人にとっては、好都合である。
- ・しかし、意欲のない学生を、はじめから門口でシャットアウトして、それでいいのか、特に哲学はそんなことでいいのか、というのが私の年来のジレンマである。私の授業の履修者が多いのも、このジレンマを、今なお突破できないことのあらわれである。

△「留年」制度はもっとフレキシブルに

- ・留年かどうかの判定は、厳正に、形式的にやればいい。「温情」主義は、むしろ、現在のような温情主義が浸透するもとでは、有害である。
- ・ただし、単位不足で、留年したら、一年分の授業料をおさめなければならないのは、あまりに形式主義的である。一定のペナルティを課すのはいいが、単位数分プラス α を支払えば、望む科目をとって卒業できる、という制度はぜひ必要だ。
- ・これは、専攻を変更して、あるいは、新しい資格を取ろうとして、あるいは違った分野を学び直して、複数の学部をまたいで卒業する学生に、歓迎されるのではないだろうか？

これによって、高齢者、転職者のためのリカレント教育の場として、大学が少なくない働きが可能となるだろう。

#10 教師の評価について

少なくとも、以下の4要素を加味しなければならない。

△教師仲間だけの評価

△第三者機関の評価

△学生評価

△教師の自己評価

#11 教師の採用と待遇について

以下の諸点の大改革が必要である。大学は、まずもって教師の能力アップをあらゆる施策の前提に置くべきである。ただしそのために、待遇アップを図る必要がある、といたいのではない。逆である。大学の世界も、任期制が普通になってきたのである。

△公募と採用の公開制

△常勤は40～45歳までは、長期契約(たとえば、10年)。45歳を過ぎるれば、短期契約(たとえば、1年からせいぜい3年契約)

△定年制の廃止

△非常勤講師集団の確保と充実

講師の数の拡大と質の充実は、大学存立の基本になる。いい講師の発掘(リストアップ)と採用を、意識的におこなう。すぐれた講師団を確保する、これは大学のレベルアップと経営の両面から、死活の問題になる。

△教師の再教育機関(プール制)の設置

たんなる救済措置ではない。教師の能力アップのためには、必須なのである。全国的な規模でできなくとも、契約切れの教師の再任のチャンスをはかるためにも、大学が単独でも模索する必要がある。このためには、大学内に資格審査機構が必要になる。

△「高度教養」を研究教育する機関の創設

この機関創設は、全国的にだけでなく、単独にも追求される必要がある。むしろ、札幌大学の将来展望と結びつけて、練られる必要がある。いってみれば、フランスのノルマル・シュペリウールのような機関である。

終わりに

一年間平成14年4月1日から12ヵ月の国内留学は、当初望んだ以上の「成果」を私にもたらせてくれたように思える。長い教師生活の反省と今後の展望に、はっきりした「線」を引くことができた、少なくともその可能性をはっきりさせた、と思えるからだ。

後どれくらい教壇に留まることができるかどうかは、自分でもわからないが、与えられた時間をやり抜くことができる、そのための課題もはっきりした、ということはできる。

簡単だが、このような貴重な時間を与えてくれた、札幌大学の同僚の厚意、研修先の学部と指導教授の厚遇、文部科学省等の支援にたいして、感謝したい。[本ノートは、平成14年度研究助成(国内留学)による研究成果の一端である。全面展開は後日に期したい。]